

金融政策パネル

金融政策分析の最近の潮流と金融危機

神戸大学 宮尾龍蔵

<問題意識>

金融政策分析はこの10年ニューケインジアン・動学的確率一般均衡モデルをベースに大きく進展した。このパネルでは近年の発展とその意義を概観するとともに、一方で今般の金融危機を予測できなかった反省を踏まえ、金融政策モデル分析における今後の課題について討議する。候補となる論点は下記のとおり。

ニューケインジアン分析の意義・貢献：基本のNKモデルの特徴、ミクロ基礎付け・ルーカス批判、最適金融政策・厚生分析、インフレ目標政策、さまざまな拡張（インフレ予想の不確実性、不完全情報・ラーニング、ゼロ金利制約、時間軸政策、資産価格の役割、金融市場・労働市場の摩擦、NKフィリップス曲線など）

動学的一般均衡分析の意義・貢献：基本のRBCモデル・ミクロ的基礎付け、金融政策・マネーの役割（マナリーDSGEモデル）、様々な拡張・論点（大不況・通貨危機のRBC分析、ビジネスサイクル・アカウンティング、TFP推計、資産価格のブーム・バースト・サイクルなど）

金融政策分析としての論点：「外生的な金融政策ショック（政策効果の分析）」と「内生的な金融政策ルール（代替的な政策ルールの比較分析）」、モデルの実証的な評価方法（インパルス反応、構造ショックの識別、モデルのフィットなど）。マネーの位置づけ。政策判断への有用性。

現実経済の描写モデルとしての有用性と課題（特に今般の金融危機との関係）：

均衡からの長期的・持続的な乖離、金融システム/金融的な摩擦・不均衡の取扱い（過剰なリスクテイク・非効率部門への貸出、過剰債務・レバレッジなど）、最近の取組みの紹介など。